

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動

The Labour Year Book of Japan special ed.

第二編 産業報国会運動

第二章 大日本産業報国会の結成

一九四〇年七月には、社会大衆党と日本労働総同盟が解散した。残っていた労働組合もほとんどが解散し、産業報国会へ組みこまれていった。第二次世界大戦前の労働運動は、ここで終止符を打つことになった。労働組合幹部の多くは「全従業員の身分、待遇、その他の諸問題をとりあげ、産報機関を通じて労働組合的役割を可能な限り果すことを自慰的に口実としながら、産業報国会の役員として転身した(「東交史」)。

一九四〇年二月八日、閣議決定をみた「勤労新体制要綱」は、産報運動をつぎのように規定している。「国体の本義に基く皇国産業の本質と、皇国産業人の真使命に立脚して産業報国精神を確立し、其の普及徹底を図ると共に、新産業勤労体制を樹立して、其の全機能を振興発揚し、天業を翼賛し奉らんとする官民一体の組織的国民運動である」と。産業報国聯盟自体も、「我国現下の内外状況は日に月に緊迫を増し銃後生産の重大職域を担当する産業人の使命弥々重大を加ふるに至ったのである。此の秋に当り産業報国運動を新たなる拍車の下に飛躍せしめ、新たなる構想の下に、進展せしむべき強力なる中央機関を設置することは正に不可避の要請である」と声明した(「産業報国」終刊号)。

かくて、労働組合の廃墟のうえに、一九四〇年十一月二三日、大日本産業報国会が結成されるにいたった。それは五五〇万の労働者を組織したが、労働組合とは似てもつかぬものであり、内務省および厚生省が支配する膨大な戦時動員と抑圧の官僚機構であった。産報は、労働者を強制的に軍需生産へかりたて、資本家には無制限の搾取を保証する奴隷的労働の組織であった。こうして戦争体制は完成され、翌一九四一年末に、いよいよ太平洋戦争が開始された。

一九四〇年十一月二三日、東京で開催された大日本産業報国会の創立総会ならびに創立記念大会の様子を、内務省警保局編「社会運動の状況」(昭和一五年)は、つぎのように記録している。

当日は午前九時より創立総会を開催、金光厚相以下官民創立委員約二百名出席、北村労政課長の開式の辞によりて開会、宮城遙拝、国歌斉唱、詔書奉読(厚生大臣)戦歿並に傷痍将兵に対する感謝黙禱の後、金光厚生大臣の挨拶、児玉厚生次官の経過報告ありて議案審議に移り同次官より創立宣言、綱領、会則の各案を簡単に説明、満場一致を以て可決し、次で役員を発表、午前十時三十分閉会したるが、閉会直後金光総裁以下役員代表十名は明治神宮に参拝之が報告を行ひたり。

之と時を同じうして日比谷公園に集合したる東京市を中心とせる産業報国会員及府県代表約一予二百名は之を大隊編成とし隊伍を整へて行進を開始し宮城遙拝、靖国神社の参拝を行ひて職分奉公の決意を新にし創立総会に於て新に選任せられたる役員に迎へられて会場(軍人会館)に至りたり。

斯くて午後一時より創立記念大会を開催(出席者約一千六百名)理事君島清吉の開

会の辞に次で午前と同様、宮城遙拝、国歌斉唱、詔書奉読、戦歿傷病将兵に対する感謝黙禱等ありたる後、湯沢理事長の経過報告、平生会長の創立宣言、並に宣誓文の朗読、綱領の発表あり続いて金光総裁の告辞、近衛総理大臣（代理星野企画院総裁）、安井内相、小林商相、大政翼賛会総裁（代理後藤文夫）の祝辞を終へ、金光総裁の発声により聖寿万歳、星野総理大臣代理の発声による大日本産業報国会万歳を唱和して閉会せり。

閉会后陸軍省情報部長松村秀逸大佐の「新秩序への発展」と題する講演並に工場音楽団の合同演奏松竹移動劇団の「楠公桜井の駅」の上演ありて散会、茲に全産業報国会を其の組織基底とする大日本産業報国会は力強き発足を為すに至りたるが本会の使命とする所は飽迄大政翼賛運動の一翼として、本運動の組織並に機構の整備充実に強力なる指導統制を行うと共に進んで、高度国防国家建設の主体条件たる勤労新体制の確立の推進力たらんとするにあり、一般産業労働界も挙げて本会の活動に期待をかけつつあるを以て本会の結成は国家的に重大なる意義を有するものと認められる所なり。

大日本産業報国会創立宣言

今や世界は未曾有の転換期に際会す。皇国亦東亜新秩序建設に任じ、世界新秩序完成に邁進せんとす。その使命洵に宏大なり。

然れども高度国防国家体制とその根幹たる新産業労働体制を確立するに非ざれば、何んぞその使命を果し得べけん。

凡そ皇国産業の真姿は、肇国の精神に基づき、全産業一体、事業一家、以て職分に奉公し皇運を扶翼し奉るにあり。全産業人は、資本経営労務の有機的一体を具現し、皇民勤労の真諦を発揮し、以て国力の増強に邁進せざるべからず。皇国躍進の基調並に存す。我等皇国産業に与る者、夙に念ひをここに致し、洽く職場に産業報国会を組織し、産業報国精神の高揚実践に挺身し来れり。為に全産業人協心戮力の実漸く挙り、勤労の創意、能力亦大に伸暢し、産業労働界はその面目を一新せんとす。この成果と組織を総括して一大国民運動たらしむるの要今や極めて切なるものあり。

皇紀二千六百年の秋、新嘗祭の佳き日をトし、我等ここに大日本産業報国会を結成し、光輝ある新任務に就かんとす。我等の使命は、実に愛国の至情を産業報国運動に結集して曠古の国難を克服し、以て永遠不動の皇国産業道を樹立せんとするにあり。責務の重きを念ひ、決意更に新たなり。勇躍、我等行かんとす！

職場は我等にとって臣道実践の道場なり。勤労は我等にとって奉仕なり、歓喜なり、栄誉なり。手段に非ずして目的なり。艱苦欠乏何かあらん。剛健なる意志、不屈の気概、範を垂れ衆を化し、塵烟の下、響音の裡分を尽し職に生き、以て皇国の弥栄を効さむ。

大日本産業報国会綱領

一、我等は国体の本業に徹し全産業一体報国の実を挙げ以て皇運を扶翼し奉らむことを期す

一、我等は産業の使命を体し事業一家職分奉公の誠を徹し以て皇国産業の興隆に総力を竭さむことを期す

一、我等は勤労の真義に生き剛健明朗なる生活を建設し以て国力の根抵に培はむこと

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動

発行 1965年10月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2000年2月22日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
